



大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER
No.6

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学 大学史資料室 協創研究センター・大学 史編纂研究所 公開日: 2024-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000206



写真1

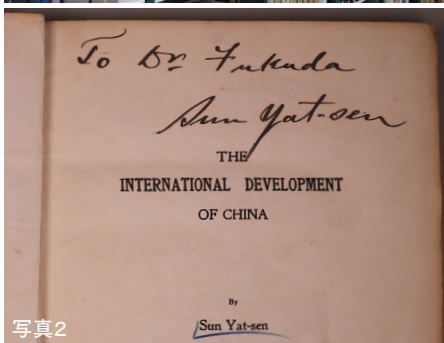


写真2

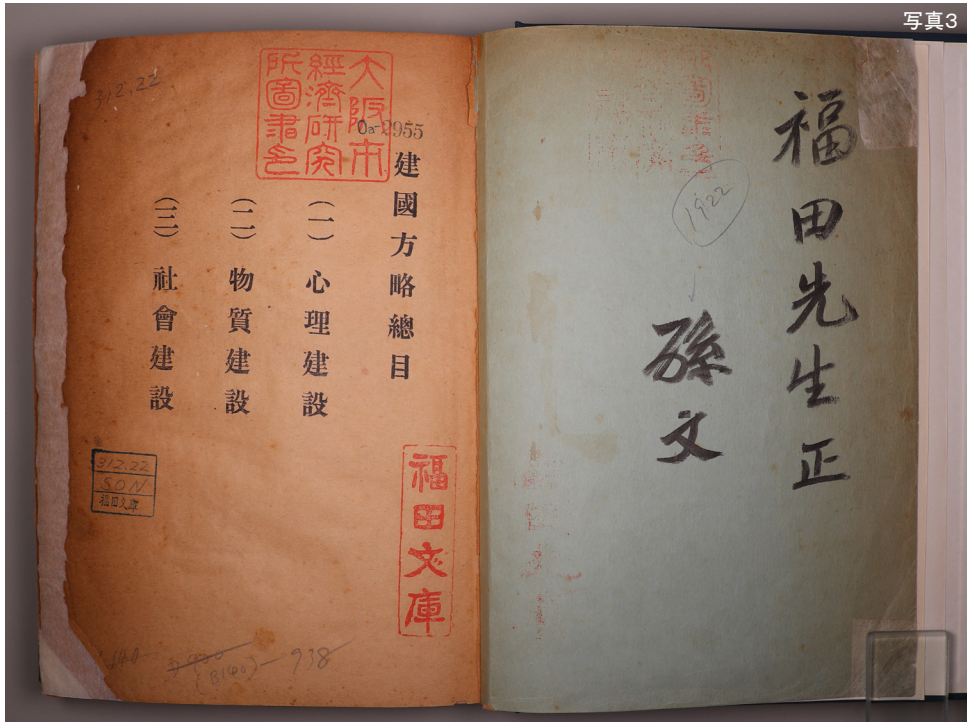


写真3

写真1：杉本図書館に収蔵されている福田文庫。 写真2：『The International Development of China』 写真3：『建國方略』 ページが補修されている。

孫文からの贈り物—福田文庫の中国書—



大阪公立大学杉本図書館には、経済学者の福田徳三（東京商科大学ほか、1874-1930）の旧蔵書が「福田文庫」（44,841冊、写真1）として収められている。福田文庫といえば、洋書、とりわけ経済学・商学に関する書籍が中心と思われるかもしれない。もちろんこうした理解に間違いはないのであるが、本号で磐下徹氏が取り上げている『政事要略』のように、実はかなりの分量の日本や中国の古典籍も所持していた。

漢籍（一般に中国の古典籍）についていえば、コレクターのように珍しい漢籍を買い集めたというのではなく、自分の研究と関係がありそうなものを選択的に購入していたようである。たとえば、馬端臨（1254-1324）によって撰述され、古代から南宋時代に至る歴代の諸制度をテーマごとに整理した『文献通考』、その続編ともいえる『欽定続文献通考』・『皇朝文献通考』、さらにはそれらを編纂し直した『文献通考正統合纂』・『文献通考正統合編』が収められている。収蔵されている漢籍から、福田の学問的関心を窺い知ることができよう。

また、当時混乱の最中にあった中国との接点が垣間見

える書物も福田文庫には収められている。それは「革命の父」＝孫文（1866-1925）の署名の入った書籍である。

The International Development of China (Shanghai: Commercial Press, 1920年、写真2) は、同時に出版された『実業計画』（上海：商務印書館、1920年）の英文版である。『建國方略』（上海：民智書局、1922年、写真3）は、『孫文学説』・『実業計画』・『民権初歩』の3冊の単行本を合本したもので、孫文の思想を理解するうえで必読文献とされている。写真2には「To Dr. Fukuda Sun yat-sun」（孫文の号である「逸仙」のローマ字表記）、写真3には「福田先生 正 孫文」と署名されている。なお、写真2には、数ヶ所ではあるが、赤鉛筆による線が引かれている。残念ながら、いつどこで・どうして福田が孫文からこの書籍を受け取ったのか、定かではない。

大阪公立大学の図書館には個人の収集した蔵書が「文庫」として多数収められている。その一冊一冊には、所蔵者の手元に収まるまでの大小様々なドラマが秘められている。秘められたドラマを空想しながら、碩学の触れた書物をめくるのも、読書の楽しみの一つである。

（文学研究科 渡辺健哉）



大阪公立大学・高専基金へのご寄附のお願い

お申込み時に「特定プロジェクトのために：⑨-3、⑨-7」を選択してください。（⑨-3：1号館ミュージアム構想のために ⑨-7：大阪府立大学創基140年事業のために）

【お問い合わせ】 渉外企画課 TEL: 06-6605-3415 <https://www.omu.ac.jp/fund/>

編集発行
大阪公立大学 大学史資料室
協創研究センター・大学史編纂研究所
杉本キャンパス学術情報総合センター6階（大学史資料室）
Tel : 06-6605-3371 E-mail : gr-gakj-archives@omu.ac.jp

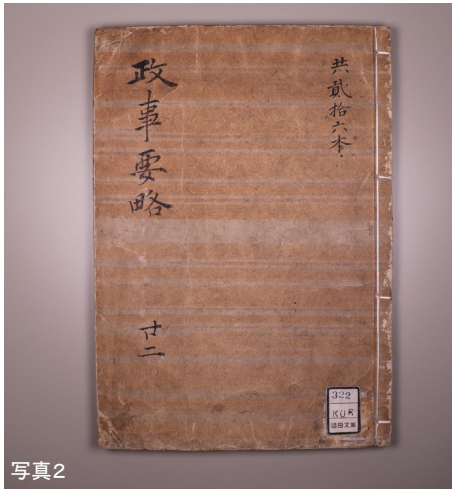


写真2

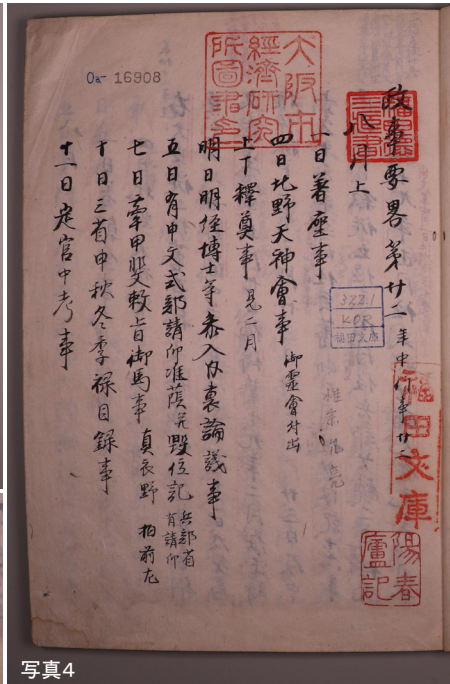


写真4

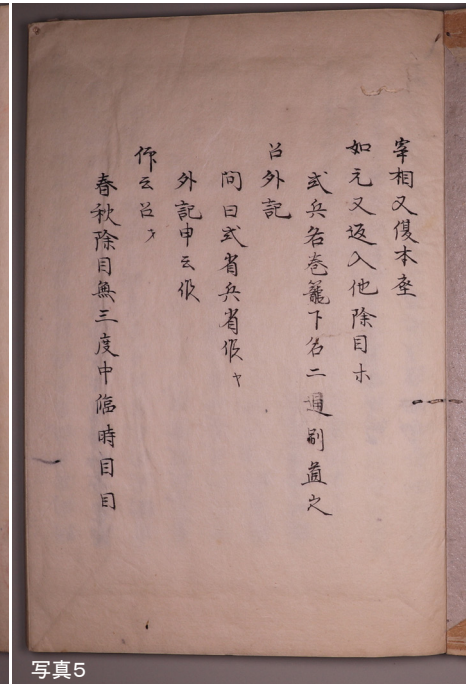


写真5

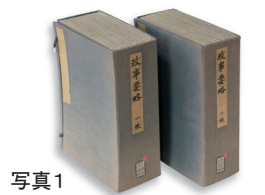


写真1



写真3

写真1: 福田文庫に収蔵されている『政事要略』 写真2: 第1冊表紙。 写真3: 第26冊第36丁(裏)。狩谷椋斎の蔵書印(「湯島狩谷氏求古楼図書記」)。 写真4: 第1冊第1丁(表)。右下の「陽春廬記」が小中村清矩の蔵書印。他にも「福田徳三蔵書」「福田文庫」「大阪市経済研究所図書印」が捺されている。写真5: 第16冊裏表紙見返し。除目にかかわる儀式次第の一部を記載した反故紙が再利用されている(実際は天地逆に使用)。

福田文庫本『政事要略』の魅力

福田文庫には、平安時代の史料である『政事要略』の写本(以下、福田本。写真1・2)が収蔵される。『政事要略』(以下、『要略』)は、平安中期(11世紀初頃)に惟宗允亮が編纂した書物である。先例となる日記や儀式書、律令格式などの法制史料を引用し、年中行事をはじめ当時の主要な政務を解説している。引用史料は多岐にわたり、現存しない史料の一部が引用されることもある。

鎌倉時代の図書目録である『本朝書籍目録』に全130巻とあるが、現存するのは25巻である。このうちの3巻は鎌倉時代に写された金沢文庫旧蔵本が残り、加賀前田家に伝わって前田育徳会尊経閣文庫所蔵となっている。他は概ね近世以降の写本である。近世には散逸した『要略』が収集され、加賀前田家第4代の前田綱紀らが、現存する全25巻を見出だした。福田本はそのうちの滋野井公澄書写本(全25巻、18世紀半ば頃、現在は京都大学附属図書館と宮内庁書陵部に分蔵)の系統に属する写本である。

福田本は、現存する『要略』25巻を26冊に収録する。書写年代は未詳だが、狩谷椋斎(1775～1835)の蔵書印があり(写真3)、成立の下限は18世紀末～19世紀初と

なる。また、小中村清矩(1822～1895)の蔵書印も捺され(写真4)、第1～4冊の奥書には、明治2年(1869)に勝田元徳が小中村とともに「紀伊古学館本」と照合し本文の異同を確認した旨が記される。『要略』の活字本は、昭和10年(1935)に刊行された新訂増補国史大系本(黑板勝美編、吉川弘文館)が最もポピュラーだが、その凡例で福田本は「善本なり」とされ、底本に採用されている(巻25・26・69は尊経閣文庫本が底本)。福田本が高く評価されたのは、近世後期～明治初期の著名な学者の間を伝来したことと、彼らによる書き入れなどが重視されたからだろう。

これに加え、福田本は扉や裏表紙の見返しに反故紙を再利用しており、そこに公家の日記や儀式書の一部の抜書が残っていることがある(写真5)。これが福田本成立当初のものであれば、公家の年中行事などを研究していた者が書写に関与したと考えられる。これらを追究すれば、より具体的な書写状況を知ることができるかもしれない。今後の研究の可能性も含め、福田本は興味の尽きない魅力的な史料である。(文学研究科 磐下 徹)



資料室だより

◆大学史資料室では「大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER」を発行しています。大阪公立大学の貴重な学術資料や大学の歴史を紹介いたします。◆この「NEWS LETTER」は、大阪市立大学「140周年展+大学史資料館(大学博物館)設立準備 NEWS LETTER」の後継紙であり、「大学の知を発掘!」の番号を引き継いでいます。両紙とも大阪公立大学 大学史資料室のホームページ、図書館ホームページの機関リポジトリで公開しています。

大学史資料室からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→杉本キャンパス学術情報総合センター6階 大学史資料室
Tel: 06-6605-3371